

学校管理下における生徒の負傷に関する研究

生徒の「自意識」に着目して

伊藤 友美子 ・ 川崎 裕美* ・ 山崎 智子*

要約:日本スポーツ振興センターの統計資料によると、中学校は他の校種よりも多くの負傷が発生している。本研究では、生徒の「自意識」に着目し、質問紙と負傷による保健室来室回数との比較を通じて、自意識と負傷頻度の関連について検証することを目的とした。その結果、負傷の多い生徒の方が自分の内面への関心が低い傾向にあり、私的自意識の低さが負傷頻度に影響を与えている可能性が示された。

キーワード: 負傷, 安全, 自意識, 保健室利用状況

I. はじめに

「安全」は、私たちにとって必要不可欠なものである。安全とは「心身や物品に危害をもたらす様々な危険や災害が防止され、万が一、事件・事故災害が発生した場合には、被害を最小限にするために適切に対処された状態」をいう（文部科学省，2010）。アメリカ合衆国の心理学者 A. H. Maslow の「欲求階層説」によると、安全に対する欲求は、空気、水、食べ物といった生きていくうえでの基本的な欲求の上に成り立つ欲求である。また、仲間や集団に属することや、他者から認められること、自己の能力を最大限に生かし、創造的活動を行う欲求は、安全に対する欲求の上に成り立つものであるとしている。このように、私たちが多くの人と関わり、いきいきと活動するためには、安全に対する欲求が保障されていることは前提条件である。しかし、今日の社会においては、事件や事故、自然災害といった私たちの安全を脅かす様々な危険が存在する。そのため、安全を確保するための取り組みや意識の向上が国・地域、学校、家庭といった社会全体に求められている。

学校においては、日々様々な負傷が発生している。独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下、スポーツ振興センターと表す）「災害給付状況」の統計資料によると、平成 25 年度における学校（義務教育諸学校、高等学校、高等専門学校、幼稚園（保育所を含む））の管理下における災害の発生件数は 1,097,377 件であり、発生率（発生件数÷加入者数×100%）は 6.5% である。これは、スポーツ振興セン

ターに報告された、学校の管理下の事由により、療養に要する費用の額が 5,000 円以上の負傷・疾病の件数である。「学校の管理下」とは、スポーツ振興センター災害共済給付の基準に関する規程に定められた、以下のような場合を指す。

- ① 学校が編成した教育課程に基づく授業を受けている場合
- ② 学校の教育計画に基づく課外指導を受けている場合
- ③ 休憩時間に学校にある場合、その他校長の指示又は承認に基づいて学校にある場合
- ④ 通常の経路及び方法により通学する場合
- ⑤ 学校外で授業等が行われるとき、その場所、集合・解散場所と住居との間の合理的な経路、方法による往復中
- ⑥ 学校の寄宿舎にある場合

災害発生件数を学校種別で見ると、中学校では、389,284 件であり、このうち、92.1% にあたる 358,468 件が傷害によるものである。中学校における災害発生率は 11.1% で、小学校 (5.9%)、高等学校 (全日制 7.5%、定時制 2.3%、通信制 0.4%)、高等専門学校 (4.5%)、幼稚園 (1.8%)、保育所 (2.2%) よりも圧倒的に高い。また、都道府県別の発生率を見ると、広島県の発生率は 9.0% であり、全国で最も発生率が高い。このような現状から、広島県の中学校に勤める教員として、また、学校保健において中核的な役割を担う養護教諭として、学校管理下における負傷防止に努めることは喫緊の課題であると考えられる。

負傷が発生する要因には、発育・発達段階、心身の状態、規範意識、行動等の「人的要因」と場所、天候、時間、施設・設備、用具等の「環境要因」があり、多くの負傷は、これらが関連し合っ起っている（渡邊，2012）。また、健康の自己管理の重要性が指摘されており、児童生徒が自分の身体や体調への意識、関心を高められる機会を確保することが教育現場には求められている（中村，2013）。これらのことから、負傷が発生した状況と生徒の実態や生徒を取り巻く環境を併せて分析し、生徒自身に自己理解を図らせ、安全への意識や自己管理能力を育む視点から学級や部活動等の集団、あるいは個別への指導を計画、実施していくことが、自校の負傷発生を防止するために必要と考えられる。また、学校での負傷という生徒に身近な「危険」を取り上げて安全を考えることは、健康教育を目指した「学校保健」と、生徒の安全を確保する環境を整える「学校安全」を相互に関連させた点において有意義である。

II. 研究の目的

本研究の目的は、生徒が自分自身にどの程度注意を向けているのかを質問紙により測定し、負傷による保健室来室回数との比較を通じて、「自意識」と負傷頻度の関係を明らかにすることである。このことにより、負傷発生を防止する指導の手がかりを見つけていきたい。

III. 研究方法

1 対象生徒

本研究の対象は、広島大学附属東雲中学校全生徒（特別支援学級を除く）238人である。なお、1学期以降に転出入した生徒については、質問紙調査を未実施のため、調査対象としていない。

2 調査内容及び検証方法

（1）負傷による保健室利用状況の集計

保健室利用状況については、平素から来室理由、負傷の種類、負傷場所、時間について集計を行っている。また、平成26年度1学期には、負傷による来室回数を個別に集計した。

（2）「自意識尺度」質問紙調査の実施

「自意識尺度」質問紙は、自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差を測定するアンケートである。菅原（1984）は、公的自意識と私的自意識の程度の個人差について、21の質問項目を設定し、7件法で回答させた。〔注1〕

本研究では、「自意識尺度」質問紙に以下の変更を加え、実施した。

- ① タイトルを「自分自身に関する質問紙調査」とし、記名の欄を作った。
- ② 【公的自意識】【私的自意識】という言葉を除き、質問項目の順番をランダムにした。
- ③ 「1. あてはまらない」「2. ややあてはまらない」「3. ややあてはまる」「4. あてはまる」の4件法とした。
- ④ 自意識尺度の質問項目とは別に、保健室来室に関する質問を加えた。

①・②については、質問紙調査によって測定される特性が明らかでない方が、生徒に先入観を与えずに、ありのままを回答しやすいと考えた。本来ならば、無記名の方が回答しやすいかもしれないが、負傷頻度との比較や調査結果を踏まえた個別・集団の保健指導を行うために記名式とした。また、②については、同じような質問が連続することを避けることで、生徒が一問一問じっくり考えて回答すると考えたため、2つの自意識に関する質問項目をランダムにした。③については、7件法は、「非常に」や「やや」など、肯定・否定の度合いを踏まえて回答しなければならず、中学生には難しいと考えたこと、「どちらともいえない」という中間選択肢を排除することにより、質問紙への回答を、生徒が自分自身と向き合う機会とすることを目指したため、4件法とした。④については、保健室来室者数には含まれていない学校における負傷が、どの程度発生しているのかを研究の参考とするために質問項目を加えた。

（3）集計・調査結果の分析

- ① 1学期の負傷による来室回数をもとに、生徒を4つのグループに分ける。
- ② 「自分自身に関する質問紙調査」の回答結果から、生徒の「公的自意識」、「私的自意識」そ

それぞれの得点を算出する。

- ③ 負傷による来室回数と公的自意識・私的自意識点数,あるいは各質問項目に対する回答について比較する。

IV. 結果

1 負傷による保健室利用状況について

対象生徒の1学期(4月8日～7月18日 71日間)の負傷による保健室利用は221件だった。負傷別にまとめると表1のようになった。擦り傷や切り傷といった軽傷のものから、打撲や捻挫、骨折といった医療機関での治療が必要なものまで様々な負傷があった。また、オーバーワークや原因のわからない(負傷した覚えのない)痛みを訴えて来室した生徒も多くおり、自身のからだの状態や置かれている環境についての意識の低さが窺えた。

表1 負傷別保健室利用状況(人)

	1年	2年	3年	計
すりきず	12	6	12	30
切り傷	4	4	4	12
打撲	14	28	14	56
捻挫・靭帯損傷	2	7	8	17
突き指	1	4	4	9
骨折	1	1	1	3
脱臼	0	1	0	1
痛み	3	30	19	52
その他	8	21	12	41
学年合計	45	102	74	221

一人一人の負傷による保健室来室回数は、表2のようになった。半数近い生徒が負傷での来室を一度もしていない反面、月に1回以上(1学期に4回以上)来室している生徒も10人いることがわかった。

表2 保健室来室回数(人)

来室回数	1年	2年	3年	計
0	47	31	37	115
1	23	24	26	73
2	6	9	8	23
3	2	12	3	17
4	1	1	3	5
5	0	0	1	1
6	0	2	1	3
7	0	0	0	0
8	0	1	0	1
	79	80	79	238

本研究では、生徒を負傷による来室回数によりA(0回)、B(1回)、C(2～3回)、D(4回以上)の4つのグループに分けた。

2 「自意識尺度」質問紙調査について

9月に対象生徒に質問紙調査(資料I)を実施した。未記入のあった13人を除く225人の質問項目ごとの集計結果は表3のとおりである。

表3 「自意識尺度」質問紙調査の集計結果(%)

設問	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
1	9.8	23.1	48.0	19.1
2	6.2	16.4	48.9	28.4
3	9.8	26.7	44.0	19.6
4	7.6	26.7	41.8	24.0
5	36.9	46.2	14.7	2.2
6	25.3	35.1	27.6	12.0
7	22.7	33.8	28.9	14.7
8	17.8	36.4	30.2	15.6
9	15.6	48.4	28.9	7.1
10	11.6	22.7	44.9	20.9
11	9.3	40.4	36.4	13.8
12	8.0	26.2	45.3	20.4
13	12.0	36.4	34.2	17.3
14	6.7	28.4	42.7	22.2
15	8.9	28.9	41.8	20.4
16	16.0	38.7	31.1	14.2
17	8.9	21.8	42.2	27.1
18	11.6	48.0	28.4	12.0
19	12.9	41.3	32.0	13.8
20	9.3	36.4	36.9	17.3
21	6.7	26.2	37.3	29.8

まず、男女間で自意識得点の差を検討するため、Mann-WhitneyのU検定を行った。公的自意識得点、私的自意識得点、合計点いずれについても男女間で有意な差は認められなかった。(公的自意識得点: U=5432.0, n. s. 私的自意識得点: U=5752.5, n. s. 合計点: U=5506.5, n. s.)

次に、各自意識得点についての平均点、標準偏差は表4のようになった。[注2]

3 来室回数と「自意識」得点との比較

(1) 来室回数について

来室回数の学年別人数は表6のとおりである。

表6 来室回数の学年別人数(人)

グループ (来室回数)	1年	2年	3年	計
A(0回)	45	31	35	111
B(1回)	19	23	26	68
C(2~3回)	8	18	10	36
D(4回以上)	1	4	5	10

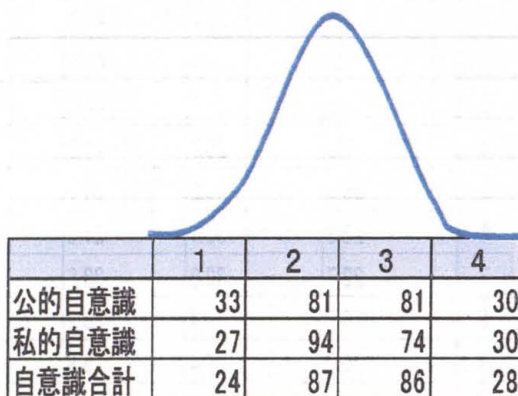
表4 各自意識得点の平均点と標準偏差

	平均点	標準偏差
公的自意識	28.3	6.23
私的自意識	26.1	5.32
合計点	54.4	9.99

また、公的自意識、私的自意識、合計、それぞれの得点について、標準偏差をもとに4つのグループに分けた集計結果は表5のとおりである。

[注3]

表5 自意識得点グループの人数(人)

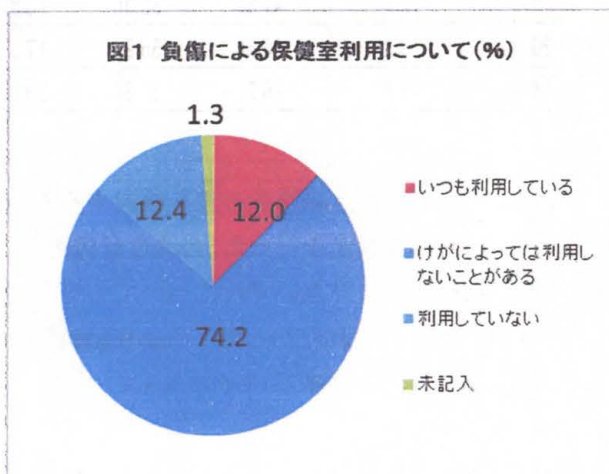


また、来室回数ごとの自意識得点の平均点は表7のようになった。

表7 来室回数グループごとの自意識得点(平均点)

グループ	公的自意識	私的自意識	合計
A(0回)	28.5	25.9	54.5
B(1回)	28.8	26.4	55.1
C(2~3回)	26.8	26.4	53.2
D(4回以上)	27.5	24.7	52.2

保健室利用に関する質問では、図1のような結果となった。また、「利用していない」と回答した生徒28人のうち、負傷自体がなかった生徒が12人、実際には負傷での保健室利用があった生徒が6人、負傷をしたものの保健室を利用しなかった生徒が10人だった。



分散分析をしたところ、来室回数の効果が有意ではなかった。(公的自意識: $F(3, 221)=0.90, n.s.$ 私的自意識: $F(3, 221)=0.36, n.s.$ 合計: $F(3, 221)=0.45, n.s.$) したがって、来室回数による自意識得点の違いは見られなかった。

また、各質問項目について分散分析を行った。問14「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」について、来室回数の効果が有意であった($F(3, 221)=3.35, p<.05$)。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、来室回数グループDとA、DとBの間についてのみ有意な差がみられた($Mse=0.72, p<.05, p<.05$)。したがって、来室回数4回以上の方は、来室回数0回または1回の人よりも、自分の内面にあまり関心がないという結果になっている。

さらに、来室回数3回以下のグループ(A・B・C)と4回以上のグループ(D)について χ^2 検定を行った。その結果、有意に差があり、来室回数4回以上の方は、来室回数3回以下の人よりも自分の内面にはあまり関心がないという結果にな

った ($\chi^2(1)=9.26, p<.005$)。

(2) 来室回数と自意識得点グループについて
来室回数と得点グループの関係を表8に示す。

表8 来室回数と得点グループのクロス集計表(人)

	公的自意識得点グループ				私的自意識得点グループ				合計点グループ			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
A	15	36	46	14	16	42	41	12	15	35	49	12
B	7	31	19	11	6	32	20	10	4	29	24	11
C	10	10	12	4	4	13	12	7	5	14	13	4
D	1	4	4	1	1	7	1	1	0	9	0	1

χ^2 検定を行った結果、公的自意識と私的自意識についての人数の偏りは有意ではなかった(公的自意識: $\chi^2(9)=11.13, n. s.$ 私的自意識: $\chi^2(9)=8.33, n. s.$)。しかし、合計点については、人数の偏りが有意であった($\chi^2(9)=18.41, p<.05$)。そこで合計点について残差分析を行った。その結果、来室回数グループAには合計点グループ2に属する者が少なく、グループDにはグループ2に属する者が多く、3に属する者が少ない結果が出た。

また、各質問項目に対する回答についても χ^2 検定を行った。問3「人に会うとき、どんなふうにふるまえば良いのか気になる」と問14「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」について人数の偏りが有意であった(問3: $\chi^2(9)=17.41, p<.05$ 問14: $\chi^2(9)=18.19, p<.05$)。そこで、2つの質問項目について残差分析を行った。問3では来室回数グループBには合計点グループ1に属する者が少なく、2に属するものが多い、グループCにはグループ1に属する者が多いという結果が出た。したがって、来室回数グループBで否定的な回答をしている者の多くは「ややあてはまらない」を選択しグループCは「あてはまらない」と回答している者が多い結果が出た。また、問14ではグループCには合計点グループ3に属する者が少なく、グループDにはグループ2に属する者が多いという結果が出た。したがって、来室回数グループCでは「ややあてはまる」と回答している者が少なく、グループDでは「ややあてはまらない」と回答している者が多い結果となった。

V. 考察

1. 自意識に対する関心

問14「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」について、来室回数によって回答に有意な差が見られたことにより、負傷の多い生徒の方が自分の内面への関心が低い傾向にあることが示された。

また、問3「人に会うとき、どんなふうふるまえば良いのか気になる」についても来室回数によって有意な差は見られたが、負傷回数とふるまいへの意識の相関は特定できなかった。

2. 中学生の「自意識」傾向

以上の結果から、外から見える自己の側面への意識である「公的自意識」は、他者との違いを理解し、まわりからの評価に敏感な中学生の発達段階においては比較的高まりやすい。その一方で、自分の内面などの外からは見ることのできない自己の側面への意識である「私的自意識」は、学習や部活動、課外活動等、日々忙しく過ごしている中学生にとって目を向ける機会が少なく、あるいは目を向けることの重要性に気づいていなかったり、あえて向き合わないようにしていたりする場合もある。そのため、私的自意識の方が公的自意識よりも生徒によって個人差が大きく、負傷回数を左右し得ると考えられる。

3. 負傷発生防止への取り組み

問14の結果から、自分の内面に目を向け、それをふまえた行動や判断を行うことが、負傷を防ぐ一つの手立てとなり得る可能性が示された。目に見えないものに目を向けるということは中学生という発達段階では困難と考えられる。そこで、負傷防止に向けて取り組める3つの「見える化」を考えた。

(1) 負傷発生状況の「見える化」

- ・ 部活動別の負傷発生件数を掲示する。
- ・ 保健委員会での活動に取り入れる(ポスター作成、生徒朝会等での注意喚起)。

また、保健室利用に関する回答結果から、軽度の負傷に関しては保健室を利用していない生徒も多く、学校で発生している負傷を把握することの難しさを感じた。生徒が「大した負傷ではない」と判断しても、実際には医療機関への受診が必要だったり、負傷に負傷を重ねて治療が長期化した

りすることもある。担任や部活動顧問等との連携を密にし、生徒の様子をより綿密に見ていく必要性を再確認した。

(2) 内面の「見える化」

- ・ 自分のコンディションを心とからだに分けて数値化（10段階でどのくらいか）させる。
- ・ 気分を天気や顔の表情で表現させる。

これらを部活動の前や保健室来室時に行う。生徒が自分の内面をふり返り、関心を持つ機会を与える。負傷予防の観点からの「自分への意識を高める」ことの重要性を生徒に継続して伝えていく。

(3) ヒヤリ・ハット事例の「見える化」

- ・ 部活動の代表生徒から構成される部長会を定期的に持ち、各部でのヒヤリ・ハットを報告し合う。
- ・ 発生の原因や防止するために各部活動においてできることを生徒が主体となって考えさせる場を設定する。

この際、養護教諭はオブザーバーとして参加する。各部長は部長会での内容や部員が気を付けるべきことを各部でのミーティングで共有し、活動時間や内容等の見直し、反省を行う。

VI. おわりに（成果と課題）

本研究の成果は、自意識の低さが負傷頻度に影響を与え得ることを示したことである。

今後の課題は、次の3点である。

1点目は、調査期間である。本研究では、調査期間が約3ヶ月と短い。したがって、さらに調査期間を広げて研究を進めることが必要とされる。

2点目は、重傷度への考慮である。重大な負傷の起こる背後には何件もの軽度の負傷が起きている（ヒヤリ・ハット）の視点から、負傷の内容によって点数を決める等、重傷度を考慮した研究を進めることが必要である。

3点目は質問紙における質問の仕方である。本研究で使用した「自意識尺度」質問紙は、中学生以上に使用可能であるとされている。しかし、「人の目に映る自分の姿に心を配る」「ふと、一步離れた所から自分をながめてみることもある」など、実際には中学生にとって質問を捉えることが難しい内容を含んでいたと考える。今後、再考する余地がある。

今後もこうした取り組みにより、生徒に自分への意識を高めさせることで、学校全体の安全意識を高めるとともに、生徒が自身のこととして負傷防止に取り組みるようにしていきたいと考えている。

引用・参考文献

独立行政法人日本スポーツ振興センター：平成25年度災害共済給付状況，2013。

株式会社サイエンス社：心理測定尺度集Ⅰ 人間の内面を探る<自己・個人内過程>，47-51，2011。
文部科学省：学校安全参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育，2010。

中村浩也：学校教育機関におけるスポーツ傷害管理の現状と課題，プール学院大学研究紀要，179-188，2013。

菅原健介：自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み，心理学研究，184-188，1984。
渡邊正樹：学校における子どものけがの現状と対策，母子保健情報，53-56，2012。

[注1]

菅原は、Fenigstein (1975) の質問紙をもとに作成している。自己に向けられる意識には、公的自意識（自分の外見や他者に対する行動など、外から見える自己への意識）と私的自意識（自分の内面・気分など、外からは見えない自己への意識）の2つがある。菅原が開発した「自意識尺度」質問紙は、この2つの自意識の程度の個人差について、21の質問項目（公的自意識11項目、私的自意識10項目）を設定し、「1. 全くあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. ややあてはまらない」「4. どちらともいえない」「5. ややあてはまる」「6. あてはまる」「7. 非常にあてはまる」の7件法で回答させるものである。私的自意識・公的自意識の得点は、それぞれの質問項目で選択した選択肢の数値（逆転項目は選択肢を逆にした数値）を合計して算出されるため、自己に向けられる意識が高いほど、高い得点となる。

本研究では菅原が作成したアンケート（資料Ⅰ：株式会社サイエンス社「心理測定尺度集Ⅰ」）を使用した。

[注2]

公的自意識に関する質問は、設問1～5, 7, 8, 10, 11, 16, 20(設問10は逆転項目)であり、私的自意識に関する質問は、設問6, 9, 12～15, 17～19, 21(設問14は逆転項目)である。

[注3]

公的自意識, 私的自意識, 合計, それぞれの得点について, 標準偏差 (standard deviation: S D) を算出し, 1 (平均点-1 S D未満), 2 (-

1 S D～平均点), 3 (平均点～+1 S D), 4 (平均点+1 S Dより上)の4つのグループに分けた。

謝辞

本研究を進めるにあたり, 研究に関する助言をいただいた広島大学附属東雲小学校養護教諭の後藤美由紀先生に御礼申し上げたい。

A study for students' injury under school control
-Focused on students' 'self-consciousness'-

Yumiko ITO, Hiromi KAWASAKI, and Satoko YAMASAKI

Abstract. According to the statistics of 'condition of accidental benefits' by Independent Administrative Agency Japan Sport Council, More students' injury under school control in junior high school happens than other kinds of schools. The injury is due to the human and environmental factor. In this study students' self-consciousness in the human factor was focused on. To get the clue for the prevention of students' injury, it was checked how much students pay attention to themselves with a questionnaire. From the result, through the comparison of the number of visiting a nursery room for their injury, the relationship between the frequency of their injury and their self-consciousness was inspected. As a consequence, students who have injury a lot have less concerned to themselves. This indicated the possibility that students' low self-consciousness, especially their personal self-consciousness influenced the frequency of their injury.

Key words: injury,safety,self-consciousness, the number of visiting a nursery room

自分自身に関する質問紙調査

回答欄の 0 を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。[可：●、●/ 不可：○、○、○]

学年	組	番号	氏名
----	---	----	----

I 以下の項目は、あなたにどの程度あてはまるでしょうか。「4 あてはまる」から「1 あてはまらない」のうち最も近いものひとつに○をつけてください。

④:あてはまる ③:ややあてはまる ②:ややあてはまらない ①:あてはまらない

1	自分が他人にどう思われているのか気になる。	④	③	②	①
2	初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。	④	③	②	①
3	人に会うとき、どんなふうにするまえが良いのか気になる。	④	③	②	①
4	自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。	④	③	②	①
5	人にみられていると、つかっこうをつけてしまう。	④	③	②	①
6	ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある。	④	③	②	①
7	自分についてのうわさに関心がある。	④	③	②	①
8	人前で何かするとき、自分のしぐさや姿が気になる。	④	③	②	①
9	つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。	④	③	②	①
10	世間体など気にならない。	④	③	②	①
11	人の目に映る自分の姿に心を配る。	④	③	②	①
12	自分がどんな人間か自覚しようと努めている。	④	③	②	①
13	その時々のおもいの動きを自分自身でつかんでいたい。	④	③	②	①
14	自分自身の内面のことには、あまり関心がない。	④	③	②	①
15	自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する。	④	③	②	①
16	自分の容姿を気にするほうだ。	④	③	②	①
17	自分を反省して見ることが多い。	④	③	②	①
18	他人を見るように自分をながめてみることもある。	④	③	②	①
19	しばしば、自分の心を理解しようとする。	④	③	②	①
20	他人からの評価を考えながら行動する。	④	③	②	①
21	気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ。	④	③	②	①

II あなたの学校でけがをしたときの保健室利用状況についてあてはまるものひとつに○をつけてください。(保健室を一度も利用したことがない人は、どのようなけがをしたときに利用しようと考えているのかを答えてください。)

() ① すりきず等の自分で手当てができるけがについても保健室を利用している。(利用しようと考えている。)

() ② すりきず等の自分で手当てができるけがについては保健室を利用せず、突き指や打撲等の応急処置の必要なけがのみ保健室を利用している。(利用しようと考えている。)

() ③ どのようなけがをしても保健室は利用していない。(利用するつもりはない。)

②、③ と答えた人は回答してください。

1 学期の間に、学校でけが(すりきず等を含む)をして保健室に来室しなかった回数は何回くらいですか。だいたい回数でいいので教えてください。

回

以上で質問は終わりです。ありがとうございました。